

病と健康をめぐる

中野重行 ニンゲン学

医学会出席のために初めて欧州を訪ねた半世紀ほど前の話ですが、街中の至る所で高齢者がくつろいで過ごしている姿を見かけました。当時、欧州の先進国の

から14%（高齢社会）になるまでの年数を表す「高齢化のスピード」というものがあります。日本は1970年から94年の24年で達成しました。ドイツの42年、

るか」だけを考えればよかつた人生50年時代と違い、人生100年時代は「どのようにならぬか」についても真剣に考えなくてははいけません。

「人生100年」の高齢社会

自分の最期に意思反映

65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合（高齢化率）は13〜14%で、日本（7%）の倍でした。しかし現在、日本の高齢化率は27%を超え、世界で1番の高齢

英国46年、スウェーデン82年、フランス114年に比べると、日本のスピードが著しく速いことが分かります。

を越え、世界で1番の高齢大国になりました。当時の欧州と似た光景は日本でも日常的に見かけるようになってきました。

高齢社会になることは、長寿を願ってきた人類の夢が実現しつつあるということです。現在は寿命が80年や90年を超え、100年を視野に入れる時代になっています。「どのようにならぬか」

高齢化を表す指標に、高齢化率が7%（高齢化社会）

や90年を超え、100年を視野に入れる時代になっています。「どのようにならぬか」

や医療環境の進歩が、この変化を促進してきたことは疑いありません。しかし、各種の調査結果によると、多くの人は自宅での死を望んでいません。希望と現実の間に大きなギャップが生まれています。

比重が大きくなってきたのです。今後この傾向は続くと思えます。この大きな変化に対応するように医療環境も変革が求められています。

人生の最期を迎える場所は1970年ごろまで、ほとんどの人が自宅でした。現在は80%以上の人が病院になっています。医療技術

人生の終末期をどのように迎えるのがよいのでしょうか。自分の意思が尊重される尊厳死を迎えるためには何が必要なのでしょう。この世に私たちが誕生する際は、自分の意思は全く関与できませんでした。しかし、あの世に立つ際には準備期間が与えられています。自分の最期について真剣に考える時間を持つことも重要です。少しでもいいので自分の意思を反映させたいものです。まさに「メモント・モリ（ラテン語で死を忘れるな）」なのです。（大分大学医学教授、元同大学病院院長、ホームペー

ーシは<http://www.apmc.jp>、中野重行ONLINE）